

追想録

大野陽男さんを偲ぶ

大野さんが逝ってから3か月が過ぎた。まだ彼の訃報が本当のこととは思えない。ひょっこり、あの例の深みをもった微笑を浮かべながら現れるような気がしてならない。大野さんに初めてお会いしたのは今から5、6年前だったと記憶する。最初の印象は、髪をきちんと7・3に分け、胸のポケットに洒落たハンカチをのぞかせて、体にぴったり合った背広を着こなした紳士という感じだった。しかしやがて大変きちんと周囲を見渡し広い見地からの確かな判断を下す有能な指揮官という印象に変わった。そうした印象が1年くらい続いたのだろうか。やがて、大変細やかな感情を持った人なんだな、という具合に少し印象が変わってきた。それは、私がいろいろ悩んでいるときに親身になって、さまざまな角度からアドバイスを送ってくれたからだ。やや細かすぎるくらいの配慮だったが、有能な指揮官というよりは、身内の兄貴か親父という印象だった。それは大野さんが亡くなる直前まで続いた。だから私は、大野さんが亡くなった時は、大切な兄貴を失ったような衝撃を感じた。

大野さんは、普段はあまり酒を飲まなかった。むろん煙草を吸っているのは見たことがない。しかしかつての大野さんを知る人の話だと、大変な愛煙家でしかも酒宴の方もきちっとこなされていたと聞いた。私のように第一線のビジネスマンの大野さんを知らない者にとっては、静かな大野さんという印象が強烈だが、大野さんの老朋友の印象は闘志あふれる猛将という印象である。そう言われてみれば、短期間過ごした大野さんとのお付き合いでもそのつどその片鱗は垣間見せていたということになる。普段は大野さんについて語ることはないが、亡くなられたあとで聞く大野さんの印象と私が短い間に感じ取った大野さんの印象はさほど変わらない。時々大野さんのアドバイスを聞きたいな、と思う瞬間は多いが、今はそれはできない。尊敬する人との別れとはそういうものなのか。

(早稲田大学日本自動車部品産業研究所所長
早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授小林 英夫)

大野さんの思い出

大野陽男さんは私の日産自動車入社以来の先輩で、40年以上にわたり、種々御指導いただきました。日産時代大野先輩は生産管理からスタートされ、取締役、常務取締役として、座間工場長、商品本部長、米国事業事業担当など幅広く重要な役職を歴任し、業績を上げられました。

1993年にカルソニックの社長に就任し日産グループ最大の部品メーカーを率いて、事業のグローバル化に努力を傾注されました。私は1994年に企画室、関係会社室の担当役員となり、90年代の日産の苦境をいかに乗り切るかについて、種々、相談や御指導をいただいたものです。その結果、カルソニックが競争力を向上し、生き残ってゆくにはカンセイとの合併が不可欠ということになり今日のカルソニックカンセイが生まれたわけです。

ラジエターをはじめとする熱交替部品、コンプレッサー、排気関係部品に強いカルソニックとインスト周りの部品やメーター、電子部品に強いカンセイとは補完関係にあり、理論的には良い組み合わせということは頭では理解できますが、企業文化や経営手法の異なる両社を一つにして、シナジーを出すというのは容易なことではありません。この間、示された大野(当時カルソニック社長)と高木(当時カンセイ社長)の小異を捨てて大同につくという一貫した経営姿勢と強力な指導力には今でも尊敬の念を禁じ得ません。

また、大野先輩は推されて部品工業会の会長も努められ、企業規模も業種も幅広い部品工業の発展につくされ

ました。

大野先輩で特筆すべき事は、人材育成にかける情熱と実績です。社外、社内問わず惜しまぬ努力を続けられました。カルソニックカンセイ内では日本、海外を問わず、その成果が出て来ています。欧州（特に英国）、北米（含メキシコ）では、各々の経営をまかせられる外国人幹部が育っています。

社外では、宇都宮大学客員教授、同経営協議会委員も務められましたが、一番熱意を注がれたのは小林教授のもとで活動された、早稲田大学日本自動車部品産業研究所であると思います。部品メーカーのトップや部品工業会会長としての経験、問題意識からくる情熱を持ち続けられ、日本の部品メーカーの競争力向上をめざし、次代を担うであろう国内、国外の人材育成に力をそそがれてこられました。

この度、突然、大野先輩を失ったことは早稲田大学日本部品産業研究所のみならず、日本の自動車部品産業研究所のみならず、日本の自動車部品工業界にとっても大きな損失であります。残された我々にできることはグローバルな競争や環境対応技術の競争が、益々激しくなる中で、日本の部品産業がいかに勝ち残るか努力を続けることだと思います。大野先輩のいつもの温厚な顔での「日々、怠けずにかんばれよ。」という声が聞こえる様な気がしております。

（日産自動車株式会社 相談役名誉会長 小枝 至）

大野副所長を悼む

「日本自動車部品産業の現状と将来像を多様な側面から検討し、世界をリードする自動車部品産業の構築に向けた課題を研究し、その教育、提言活動」を目的として早稲田大学総合研究機構日本自動車部品産業研究所が設立される前後から自動車部品産業論に健筆をふるってこられた大野陽男副所長が逝去された。

筆者の本務である自動車部品工業会の会長職を勤めておられたことは各位ご高承と思うが、筆者の同工業会専務理事への着任は大野会長退任後のことであり、個人的なご縁が出来たのはまさに本研究所を通じてのことである。

自動車部品産業については、中小企業論、地域振興論など、各学術カテゴリーの研究対象の一部として取り上げられることが多い。無論各領域でのアプローチはそれぞれの研究領域で重要な位置づけをされている。しかしながら「自動車部品産業」をいわば学際的な研究対象に据え、その全体像を把握するという本研究所の方法論は、実務家として「生きた企業」を取り仕切ってこられた大野副所長の発想によるところが大きいと思える。

昨年末の記念シンポジウムの際は体調不良で欠席をされた。健康状態を懸念する風聞も耳にしたが、その後「第4号には論文を書く」と仰っておられると伝え聞き、健康状態はある程度は回復されたものと考えていた私にとって、年頭の訃報はまことに青天の霹靂であった。

「見与師齊、減師半徳。見過於師、方堪伝授」 伝燈録

以て研究員自戒の言葉としたい。

（早稲田大学総合研究機構 日本自動車部品産業研究所 上席客員研究員
（社）日本自動車部品工業会 専務理事・副会長 高橋 武秀）